

この夏の大ぼう険

御津南部小・5 鈴木 悠馬

この夏、ぼくの大ぼう険が始まる。

岩手県釜石市。かまいしそこには、おばあちゃんの実家がある。いつもは、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、弟の家族全員で飛行機に乗って行っていたが、今年はみんなで行けない。でも、どうしてもぼくは、釜石に行きたい。大好きな親せきに会いたい。そうだ。一人で釜石に行けばいいんだ。ぼくは、ひらめいた。

早速、ぼくは、釜石のおばあちゃんに行ってもいいか許可を取った。いつもは飛行機だけど、今回はぼくの大好きな電車で釜石まで行こうと思った。お父さんとお母さんに反対されるかな、と心配はあったけれど、ぼくは、勇気を出して二人に相談した。意外にも、お父さんもお母さんも、

「電車にくわしい悠馬なら、大じょう夫なんじゃない。」

「お父さんがいいならいいよ。」

と、あっさりオッケーを出してくれた。

「えっ、本当。」

ぼくは、うれしすぎて思わず声に出した。こうして、ぼくの大ぼう険が決まった。

その日が近づくに連れて、興ふんがどんどん大きくなる。釜石までのチケットを手にして、本当に行けるんだと、少しずつ実感がわ

いてきた。

まだかな、まだかなと思いつながら、ついにむかえた当日。ぼくは、どきどきわくわくしながら、午前六時四十分の新幹線に乗るために、豊橋駅とよはしにお母さんで行った。

あと十分、あと五分、あと三分、駅に新幹線が来る時間が近づくに連れて、楽しみにきん張が混ざって、なんとも言えない気持ちになつてきた。

ついに、新かん線がホームにやって来て、ドアが開き、ぼくは車内に入った。ふり向くと、お母さんが泣いていた。後で聞いたら、心配で泣けてしまったのだそう。

「行ってきます。」

と言って、手をふっていると、プシューと音を立ててとびらがしまつていった。ここからは一人。本当にぼく一人で行くんだ。

車内に一人で乗っている子どもは、ぼくだけ。東海道新幹線は、何度か経験があるから少し安心だけど、東京駅での乗りかえが不安だな。そんなことを考えていると、あつという間に東京駅に着いた。一人で歩いていると、

「ぼく、一人。」

と、駅員さんに声をかけられた。どきつとしたが、

「はい、そうです。」

と答えると、

「がんばってね。」

と、はげまされ、うれしかった。

その後、何とか改札の中に入れたが、やっぱり東京で新幹線に乗

るのは大変だった。東北新幹線に乗るための改札は、他にも北陸、山形、秋田、上越新幹線じょうえつも乗れてしまう所で、少し迷ってしまっただが、何とか乗る予定の新幹線を見つけたことができた。初めて乗る東北新幹線は、緑の車体でかっこいい。ぼくは、すかさず写真を撮った。

そして、ついに列車が出発した。岩手に行くのも楽しみだったが、と中の仙台せんだいを過ぎると、車内はん売で売り始める牛タン弁当が美味しいと、おばあちゃんが教えてくれて楽しみだった。でも、「この列車には、車内はん売はございません。ごりよう承ください。」と、アナウンスが流れ、今日いちばん、気持ちが悪く落ちこんだ。

最初は、初めての車両、初めての景色が楽しかったけれど、ぼくは、だんだんつかれてきて、少しさみしくなってきた。早く新幹線からおりたくなっていた。

東京から三時間ちよつと。ようやく新花巻はなまきに着いて外へ出る事ができた。予習した通り、乗りかえの釜石線に向かう。信号機も、改札もない駅。わくわくしながら列車を待つと、三両の小さくてかわいい気動車がやってきた。早速乗りこむとおどろいた。二十人も乗っていたからだ。ローカル線だから、乗客は三、四人ぐらいかなと思っていたから、何だか申しわけない気持ちになった。

列車が出発したが、車内は地ごくだった。ディーゼル車だから、ゆれ、におい、音の三びょう子で、乗り物よいをしまいっらかった。いつもだったら、体調が悪くなると心配してくれる家族も、

今日はいない。ますますつらい。

列車にゆられ、二時間。ようやく駅にたどり着いた。列車からおりると、一気につかれがふき飛んだ。ぼくは、やったぞ。何だか、ほこらしい。しかし、改札を出るとき、ぼくはこう思った。ぼくの夏の大ぼう険は、思っていたものと少しちがった。楽しいだけでなく、つらいこともあったけど、わすれられない思い出だ。

でも、次は飛行機で来よう。